

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七条のプラットホームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱっと吐いて、暗い国へ轟と去った。

たださえ京は淋しい所である。原に真葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔のままの原と川と山である。昔のままの原と川と山の間にある、一条、二条、三条をつくして、九条に至っても十条に至っても、皆昔のままである。数えて百条に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しかろう。この淋しい京を、春寒の宵に、とく走る汽車から会釈なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ――町が尽きて、家が尽きて、灯が尽きる北の果まで通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云う。「遠いぜ」と居士が前から云う。余は中の車に乗って顛えている。東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思わなかった。昨日までは擦れ合う身体から火花が出て、むくむくと血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて総身に煮込み出はせぬかと感じた。東京はさほどに烈しい所である。この刺激の強い都を去って、突然と太古の京へ飛び下りた余は、あたかも三伏の日に照りつけられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだようなものだ。余はしゅっと云う音と共に、倏忽とわれを去る熱気が、静なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。「遠いよ」と云った人の車と、「遠いぜ」と云った人の車と、顛えている余の車は

長き轆かじを長く連ねて、狭く細い路みちを北へ北へと行く。静かな夜よを、聞かざるかと輪りんを鳴らして行く。鳴る音は狭き路を左右に遮かざられて、高く空に響く。かんかららん、かんかららん、と云う。石に逢あえばかかん、かからんと云う。陰気な音ではない。しかし寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に両側から仕切る家はことごとく黒い。戸は残りなく鎖くわとざざされている。ところどころの軒下に大きな小田原提灯《おだわらぢようちん》が見える。赤くぜんざいとかいてある。人気《ひとけ》のない軒下にぜんざいはそもそも何を待ちつつ赤く染まっているのかしらん。春寒《はるさむ》の夜《よ》を深み、加茂川《かまがわ》の水さえ死ぬ頃を見計らって桓武天皇《かんむてんのう》の亡魂でも食いに来る気かも知れぬ。

桓武天皇の御宇ごうに、ぜんざいが軒下に赤く染め抜かれていたかは、わかりやすからぬ歴史上の疑問である。しかし赤いぜんざいと京都とはとうてい離れない。離されない以上は千年の歴史を有する京都に千年の歴史を有するぜんざいが無くてはならぬ。ぜんざいを召したまえる桓武天皇の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史以前から深い因縁で互に結びつけられている。始めて京都に来たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規といっしょであった

。麩屋町ぶやまちの柵屋さくやとか云う家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映ったのは、この赤いぜんざいの大提灯である。この大提灯を見て、余は何故かこれが京都だなと感じたぎり、明治四十年の今日こんにちに至るまでけっして動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が当時に受けた第一印象でまた最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食った事がない。実はぜんざいの何物たるかをさえ弁わえぬ。汁粉しるこであるか煮小豆ゆであずきであるか眼前がんぜんに髻ほうまつする材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻すみやの迅すみかなる閃ひらきのうちに思い出す。同時に——ああ子

規は死んでしまった。糸瓜へちまのごとく干枯ひからびて死んでしまった。——提灯はいまだに暗い軒下にぶらぶらしている。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年5月12日公開

2011年5月25日修正